安楽寺寺報

聞光

第９２号
歓喜会号
2019/8/1

発行所
〒737－0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

育てる者も育てられる

信楽晃仁

七月のある朝、幼稚園の桜の木に鳩がいると職員が報告してきました。少し高い所に、小さな枝を上手に組んで巣を作り、その上にきれいな鳩が座っていました。木の下から、手を振ったり、音を鳴らしても鳩は巣の上に座ったままで、微動だにしません。目の前で手を振っても、枝を揺らしても、知らん顔で逃げることもなく、ずっと座り続けているのです。調べてみると、卵を産んでそれを守っている時の様子です。園庭でのことなので、どうしようかと悩んだ末、保健所に相談してみました。すると「自分で逃げてくれればいいが、その鳩を捕まえたり、卵を産んだものをとったりすると法律に触れる」というのです。「そこを離れてくれるまで待つか、どうしてもいてもらってはこまる状況なら、その理由を書いた申請書を役所に出し、それが認められれば、自力で巣を撤去してもらうことになる」ということでした。

自然の営みであるにもかかわらず、許可が必要とは思いもしませんでしたし、役所は申請書の審議をするだけで排除にノータッチだとは思いませんでした。

色々と考えた末、折角鳩がこの場所を選んで、上手に小枝を組んで作ったマイホーム。そしてそこには見えないけれども、小さな命が育っているのだろうと思うと、愛おしくなり、当分このまま見守ることにしました。職員にも手間をかけるし、園庭も使いづらくなるのですが、ここは鳩のいのちの為、鳩の子育てのため、みんなで少し我慢し、見守っていこうという結論に到りました。

しかし季節は梅雨の時期でもあり、雨の日も多く、大雨注意報が出るほどの大降りの日も数日ありました。雨の中鳩はどうしているんだろうと気になって見にいくと、その雨の中、濡れながらじっとそこに座り続けているのです。そしてとうとう一週間一度もこの親鳩は巣を離れることなく座っていました。時折身体を入れ替えて方向を変えるだけで、餌をとることも、食べることもなく、座り続け、大丈夫なのか、とこちらが心配していました。そこまで我が子を守り続ける鳩の姿に心を打たれたことです。

またつい先日、安楽寺のすぐ上の西谷町の空き家に野良犬の家族が住み着いたという話を耳にしました。確かによく幼稚園の前を歩いている二匹の痩せた野良犬がいます。その犬が安楽寺の下の方から、上がってくる時に、よくちくわをくわえて上がってくるのです。この話を聞くまでは知らなかったのですが、それは子どものために、どこかで頂いたちくわを、いつもくわえて家まで持って上がっているのでした。この度たまたまその姿を写真に収めることができました。

鳩にしても、犬にしても、親が子を育てるために、我が命をかけて、子のいのちを守り、子どもの育ちを願って行動しているのです。それに比べて人間はどうでしょうか。我が子でありながら、自分の思うとおりにならないから、虐待し、いのちを奪うという、動物とは全く逆の所業。同じ人間として恥ずかしく思います。人間は子を育てる親心をどこで失っ

「写真と映像について」

信楽慧

沖縄美ら海の近くでミストの中撮影した夕日

写真を撮っていると、同じ状況・場面でも構図の切り取り方によって全く違う表情になることがよくあります。皆さんも撮った写真を見てこのように感じることはないでしょうか?

「思ってた写真と違うなー。」と思うとき、その違いは、自分が実際にその風景を見た時に感じる「映像」にどれだけ近いかです。

基本的に、人間の思い出はほぼ動画になっています。思い返してみて欲しいのですが、一見静止画のような風景の思い出も、揺れる木の葉、風の動き、太陽の光、空気のゆらぎなど、動きが必ずあるのではないでしょうか?そして、その「様々な動き」を表現できていない写真に対して、私達は違和感を感じてしまう。だからこそ、「こっちはなんだか違うなー。」となってしまうのです。

この「動きのある写真」を写そうと思ったら、その場面の本質に気づく必要があります。自分の見ている場面が、何によって、どのようにして構成されているのか。これに気づくことで、動きのある写真が撮れるようになるのです。

この「本質に気づく」ということは、とても難しいことではありますが、写真だけではない色んな場面で必要なものだと思うので、少しずつ鍛えていきたいと思いました。

ものの本質に気づくという面では、最近注目を集めている仏教の「瞑想」があります。先般私も仕事の一環で体験してきました。これは「集中を向け、気づく訓練をする」側面があるものです。

私も少し興味を持っています。皆さんも一度瞑想をやってみると違う一面が見えてくるかも知れません。

編集後記

命の損なわれる事件事故が多く、心が痛みます。この度は鳥や動物に、人間の在り方を問われたように思います。その後の鳩ですが、その後いつの間にやらいなくなっており、空っぽの巣だけが残っておりました。鳩は縄張り意識が強く、必ず帰ってくるそうで、このすきに巣は撤去しました。数日後、鳩が巣のあったところに帰ってきて巣を探しながら鳴いていました。さて、卵はどうだったのか、子供はどうだったのか、不明のままです。幼稚園では一騒動でしたが、学びのご縁でした。

安楽寺マンガ通信

その４２　信楽めぐみ作

てしまうのでしょうか。

年々虐待の相談件数は増加し、痛ましい事件が後を絶ちません。最後の砦であるはずの家庭がそうした地獄になるのならば、子どもが安らげる世界はどこにあるのでしょうか。

そうした鬼の所業をする人間だけの問題ではありません。現在子どもの貧困が日本では問題になっています。これほど豊かな社会の中で、子どもが育つ環境は貧困状態であり、食べることさえもできなくて、苦しんでいるというのです。景気はよくなったと政府はいいますが、その中で、なぜ子ども達は食べることさえできなくなっているのでしょうか。

その貧困の対策として「子ども食堂」の開設が話題になっています。本願寺もその流れに乗って私たち末寺にも、子ども食堂を開設することを勧めます。しかし本当に親も子も食べられない程、この社会は貧困な状態なのでしょうか？何がそうさせているのでしょうか？

大抵こういう場合「子どもの貧困の実状を知らないからそんなことを言うのだ」と、識者のお叱りの声が聞こえてきそうですが、この度広島の某女子大が子ども食堂（朝食の無料提供）をはじめました。子どもが大学に行きながら朝食が食べられない。二十歳近くもなった子どもが、子ども食堂で食べさせてもらわないと、食べられないものなのか。疑問がつきません。

講習会で話を聞けば確かに貧困の本当に厳しい状況もあるのかもしれませんが、それを元に至る所で周りが先回りして、親の責任を肩代わりするようでは、親が我が子を育てるという親の育ちはいよいよ失われてくるのではないかと思うのです。子育てを体験できなかった子どもは、次の親世代になっても子育てできない親、子育てを知らない親を育てていく事になるとしか思えません。

ひかり幼稚園では給食の導入を拒んでいます。幼稚園の間だけでも、どうか親が子どものためにお弁当を作って欲しい。そのお弁当が必ず給食では育てられなかった親子の絆を育てていきます。今の多くの問題はその家庭の崩壊、家族の崩壊が問題の原因になっているように思うのです。

鳩や犬でも、我が子を育てるためには、命がけであり、我が欲を、我が都合を差し置いてでも、子のために与えるという思いでいるのです。この姿に学ばなくては、いずれ日本は子育てのできない国になってしまい、日本人は衰退の一途をたどるだろうと思います。

少子化で子どもが減り、必然的に労働力が減り、年金ももらえなくなってしまう時代がやってきます。誰が考えても、今のシステムがこのまま百年続くなんてことは考えられません。二千万円どころの不足ではすまないのは目に見えています。その上幼児教育の無償化や、子育て支援、社会保障とかバラマキによる施策は、いよいよ借金を重ねることになります。今日本は一一〇〇兆円の借金があり、国民一人が八五〇万円の借金を抱えている計算です。生まれてくる子も、生まれた瞬間、まだ何もしてないうちから、もうあなたには八〇〇万もの借金があるんですよ、と言う国に、誰が生まれてきたいと思うでしょうか。今後も借金は増えるばかりです。それがいずれ一〇〇〇万円の借金になっても、政府は知らん顔でしょう。嘘で固めた政治のように思うのは私だけでしょうか。

あり得ない児童虐待、我が子を育てる意識のない親、子どもの貧困、身に覚えのない借金がのしかかる社会、どれをとっても子ども達にとっては生きにくく、安住の場所は見当たりません。何が問題かと言えば、大人が問題であり、親が問題であることをいよいよ私たちは意識しなければなりません。その上で前住職が「教育は共育」と言い続けたように、子どもを育てることは、親が育つことであり、子が育つと共に私たちが育っていく道を歩まなくてはならないことを強く思うことです。幸せはそこにあるのではないでしょうか。

お念仏のしずく

「念仏に生きるもの」

私は身に袈裟をかけ、手に念珠を持っておりますが、それはみんな私の仮面になっているようです。私の心は地獄の餓鬼や、畜生の心です。こんな心をいだいたままで、人間の仮面をかぶり、僧侶の仮面をつけて、今日も生きているのが、この私です。私は改めて私の心の恐ろしさを思い、自分が自分の心を信頼しえないことを思います。しかしだからこそ、私はまた急いで、お念仏を申さずにはおれないのです。私がこんなことを思うようになったのは、ひとえにお念仏を通してのことでありますが、私はまた自分の心が、これほど恐ろしいものであることを、思えば思うほど、いよいよお念仏を申さずにはいられなくなるのです。

そして私は、今私たちが仏法を学び、念仏に生きていくと言うことは、何よりも、この私たちをとりまく世界社会の状況を浄化し、業縁を正してゆくことでなければならないと思います。「世の中安穏なれ」と願いつつ、この世の中に少しでも浄土の「かげ」を写すように、心をこめてつとめねばなりません。そのためにはどうすればよいか。念仏者にとって、それは大きく困難な課題であります。現実の社会はいよいよ複雑となり、人間の歩むべき道もますます見えにくくなってきましたが、私たち念仏者は、心をかたむけ、力をあわせて、私たちをとりまく状況の向上、業縁の浄化にこそ、いっそうつとめるべきでありましょう。

『この道をゆく』

暮らしの中の仏教語

『我慢』

釈尊は「この世は一つとして独立して存在する〈我〉というものはなく、全ては〈縁起〉によって成立し、常住性もないのである」と説かれました。したがって、仏教では〈我〉に執着しないこと〈我執〉や〈我〉をたのんで自らを高しとし、他を侮ること〈我慢〉を悪としたのです。『法華経方便品』にも〈我慢にして自ら矜高（誇り高ぶること）し、諂曲（へつらいやこじつけが上手）にして心不実なり）とあります。

ところが、一面においては（世に処する上においては）独自自尊の精神も必要であり、真理をつらぬくためには自分を曲げぬ意志力や、外部からの迫害から身を守る努力も―無我の精神より一次元低くはあるけれども―必要なことに違いありません。そうしたところから〈我慢〉という語を好意的に解釈するようになったものか、とにかくこの語を〈辛抱する〉〈耐え忍ぶ〉ということに使うようになったもののようです。

安楽寺法要案内

九月	聴石忌・彼岸会	日時　９月２１日（土） 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　北海道　光心寺 桃　井　信　之　先生 講題　真宗の眼目
十月	永代経	日時　１０月１３日（日） 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　坂　西林寺 河　野　行　昭　先生 講題　無碍の一道～救いと言うこと～
十一月	報恩講	日時　１１月１６（土） 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　東京　万行寺 本　多　静　芳　先生 講題　信心とは何を信じるのですか
十二月	成道会	日時　１２月７日（土） 朝席10:00～　昼席13:00～ 講師　呉　明円寺 竹　田　嘉　円　先生 講題　かたよらない心